

令和4年11月26日

瓜生歴史遺産の会への感謝の言葉

感謝をどう伝えればよいのでしょうか。

この度、瓜生歴史遺産の会で、私の定年に際して、じつに心のこもった懇親会を催してくださり、なんとお礼を申し上げてよいのか、ほんとうに言葉も見つかりません。

「先生、サプライズをいろいろ考えていますので」とだけ事前に聞かされ、なんとなく皆様がさまざまに考えてくださった趣向が凝らされている会であろうことは感じ取っていたのですが、まさしく全く予想もしないサプライズの連続でした。

実家の樽酒を、尾池前学長、西山会長とともに鏡開きし、この日のためにデザインされた栗の焼き印付きの榎での乾杯。ほんとうにこのような晴れがましい、思い出に残る企画に、感嘆いたしました。

じつは何も知らなかった私は、直前に壇上にあった白い布のかかったものから英勲の菰樽が表れたとき、狐につままれたようでした。

お祝いの会へのお返しにと、私が勝手に考えたのが、今年初めて製造が試みられた菊酒(菊慈童)で、皆様の健康長寿を祈念して乾杯でもしていただくというものでした。株式会社井筒様がイベントに合わせて特注されたもので、ご依頼分の出荷が終わって、ほんの少し残っていると聞いたので、井筒様にお断りした上で、それをぜひ買いとりたいと齊藤酒造に注文したのです。

緘口令が敷かれていたのでしょうか。このときも齊藤酒造ですでに樽酒のご注文を受けているということは何も教えてくれず、私は菊酒を購入して、直接ホテルに届けたのです。

まさか樽酒が用意されているとは当日まで知らないままでした。サプライズは完全に成功でした。

その後のイベント、アンケート結果の発表、クイズにと私に絡む設問に、驚いたり大笑いしたりと、とても和やかな楽しい時間を過ごすことができました。私を色で表したら？の問いで、多くの方が「桃色」とお答えになっていたのに、私自身が「緑」と答えていたことが発表されると、同じ円卓にいた息子に「自分のこと、わかってないねエ」と突っ込まれたり。楽しくも皆様のご厚情がひしひしと伝わって参りました。そして、こうした催しを企画してくださった方々、運営してくださった方々のご苦勞にも、頭の下がる思いでした。

また、メモリートークでは、懐かしい話や皆様の愛情あふれるお言葉に触れ、だんだんと感極まってまいりました。

だんだん自分のことなのかどうかさえわからなくなるほど、ぼーっとしながら（感激が過ぎるとそうなるのですね。初めての感覚でした）受け取ったのが、美しい高岡漆器の文箱いっぱい、いや溢れている皆様からのお手紙でした。そのひとつひとつに、皆様の温かいお心が詰まっておりました。自宅でゆっくり読み進めるうちに、また感極まってしまいました。

私の一生の宝物です。

会の最後には、石神先生からもほんとうに身に余る記念の俳句を頂戴しました。私の研究室での晩年は、石神先生のお支えあってのものでした。改めて心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、私のわがままでお願いし、会員でない息子を本会に同席させていただきましたこと、合わせて御礼申し上げます。

東京へ帰った後、息子から、「ほんとうに心温まる会だったね。感動したよ。」と電話が入りました。

親子ともに忘れがたい時間として、これほどの感動の出来事は、おそらく今後も決してないだろうと思います。

また、人数制限のため、ご出席が叶わなかった方々もいらっしゃったとお聞きしました。

そうした皆様も含めて、大したことをしてきたわけでもない私への温かいお心、しっかりと拝受しました。

この素晴らしいご縁を一生大切に、今後も精進しながらお返しできることは何かを考え、実行してまいりたいと存じます。

皆様、ほんとうに有り難うございました。

栗本 徳子